

〈論文〉

フェルディナント・グリムの生涯と仕事について

Ferdinand Grimm's Life and Works

馬場 綾香

BABA Ayaka

概要

フェルディナント・グリム (1788-1845) は 19 世紀ドイツ語圏における民間伝承研究の嚆矢とされる「グリム兄弟」(ヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリム) の弟であるが、「グリム兄弟」の陰に隠れてその業績は知られていない。本稿では日本において無名と言えるその人物像と生涯について記述した上で、民間伝承に関わるフェルディナントの仕事について整理する。フェルディナントは初め兄たちの協力者として『子どもと家庭のメルヘン集』(1812-57) や『ドイツ伝説集』(1816/1818) のために民間伝承を蒐集し、後には自ら『ドイツ及び諸外国の民間伝説とメルヘン』(1820) 『ドイツの民間伝説』(1838) を刊行した。また没後には遺稿を基に『山城と山のメルヘン』(1846) が刊行された。フェルディナントの伝説・メルヘン集は 19 世紀前半の学界内外における伝承の扱われ方を明らかにするために、そして「グリム兄弟」、特にヴィルヘルム・グリムの仕事との比較対象として有用である。

Key Word

Ferdinand Grimm, Brothers Grimm, Folktale

1 はじめに

フェルディナント・フィリップ・グリム Ferdinand Philipp Grimm (1788-1845) はグリム家の兄弟のひとりであるが、いわゆる「グリム兄弟」Brüder Grimm ではない。一般に「グリム兄弟」という固有名詞は、『グリム童話集』(原題『子どもと家庭のメルヘン』Kinder- und Hausmärchen) を編纂したグリム家の長男ヤーコプと次男ヴィルヘルムのふたりを指す。実際には、ふたりには他にも 4 人の成人した弟妹がいた。このうち画家としてグリム童話集にも挿絵を描いた末弟ルートヴィヒ・エーミールは比較的知られているが、四男フェルディナントはあまり有名とは言い難い。

170 の言語に翻訳され現在も広く読み継がれているグリム童話と「グリム兄弟」の名はドイツ文学のみならず様々な分野において、とりわけ民間伝承に携わる民俗学 Volkskunde、伝承文学研究 Erzählforschung/Erzählungsforschung、神話学 Mythologie などの諸学問分野において無視し得ない位置を占める。「グリム兄弟」はドイツ語圏で初めて学術的利用に堪えうる形で民間伝承の蒐集・刊行を行い、数々の研究業績をあげて近代的学問としての民間伝承研究の嚆矢となった。厳密にはこれらの

諸分野の理論・手法の何れにおいてもグリム以前に遡及することができるとしても¹、あるいはグリム的方法に克服すべき問題点はあるとしても²、グリム兄弟が民間伝承蒐集と研究の礎の構築に大きな役割を果たしたことは疑いがない。しかし、「グリム兄弟」の仕事に関してフェルディナントの少なからぬ貢献があったことは、学界の内外を問わず不思議なほど話題にされることがない。

殊に日本語文献においては、ほとんど存在を看過されていると言っても過言ではないほどである。「グリム兄弟」の事績を主眼に置いた伝記等では、当然ではあるが、弟のひとりとして名前を挙げられるのみ、あるいはあっても数行の記述に留まる³。フェルディナントが兄に協力する形で伝承を蒐集し、自らもまた伝承集を刊行したという事実については触れられない。

フェルディナントは「グリム兄弟」の協力者として、あるいはドイツ語圏に民間伝承研究が興った近代という時代を担う一画として、今一步評価されて然るべきではないのか。それにもかかわらず顧みられないことがないのは何故なのか。何故ヤーコプとヴィルヘルムのみが「グリム兄弟」と名指され、フェルディナントはその範疇に数えられていないのか。

本稿ではドイツ語圏の先行研究を基にフェルディナント・グリムの仕事と貢献を洗い直し、再評価の契機を探る。日本語文献での紹介が僅少であることに鑑み、その生涯や人物像についても詳しく立ち入りたい。なお、本稿ではカッコつきで「グリム兄弟」と表記する場合、一般に「グリム兄弟」と称されるヤーコプとヴィルヘルムのふたりのみを指し、フェルディナントや他のきょうだいを含む場合には適宜「グリム家のきょうだい」などの表記を用いることとする。

II フェルディナントの生涯と先行研究における評価

2.1 レレケ／ホフマン『知られざるグリムの兄弟』

フェルディナント・グリムを初めて詳しく取り上げたのは、ハインツ・レレケとゲルト・ホフマンによる『知られざるグリムの兄弟：フェルディナント・フィリップ・グリムによるドイツの伝説』(1979)⁴である。これはフェルディナントの遺稿から111篇の伝説テキストを復刻させ注釈を施した本で、序章としてフェルディナントの生涯をおよそ30ページにわたり描き出している。まずはレレケによるこの記述を参考に、フェルディナントの人生の諸相を追ってみる。その過程で、グリム一家の抱えていた問題にも触れることになるだろう。一家の趨勢については伝記などで既に広く知られるところではあるが、フェルディナントと「グリム兄弟」との関係を考えるために改めて整理しておく。本稿末尾に附けた略年表も参照されたい。

1 Klaus Ziegler: Die weltanschaulichen Grundlagen der Wissenschaft Jacob Grimms. In: *Euphorion*, 46 Band (1952) Sonderheft, S. 241-260. 堀越知巳：ドイツ宗教民俗学の諸相 [『早稲田商学』第312号、1985、247-268頁]。阪井葉子：ドイツ民謡収集の起源 — 啓蒙主義とロマン主義の接点としての『少年の魔法の角笛』 — [『独逸文学』第99号、1997、60-70頁]。

2 Ingeborg Weber-Kellermann: *Deutsche Volkskunde. Zwischen Germanistik und Sozialwissenschaften*. Stuttgart (Metzler) Sammlung Metzler 79. Band (1969). Kathrin Pöge-Alder: Art. Mythologische Schule. In: *Enzyklopädie des Märchens. Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung*. Hrsg. von Kurt Ranke. Berlin (de Gruyter) 9 Band (1999) S. 1086-1092. 河野眞：ドイツ民俗学とナチズム (創土社) 2005。

3 一例を挙げると、高橋健二：グリム兄弟・童話と生涯 (小学館) 1984、橋本孝：グリム兄弟とその時代 (パロル社) 2000などの伝記の中で僅かにフェルディナントへの言及がある。

4 Ferdinand Philip Grimm (Aus dem Nachlaß hrsg. von Gerd Hoffmann und Heinz Rölleke): *Der unbekannte Bruder Grimm. Deutsche Sagen von Ferdinand Philipp Grimm*. Düsseldorf/Köln (Diederichs) 1979.

グリム家の子どもたちのうち、成人に至ったきょうだいは6人いる。ヤーコプ Jacob Ludwig Karl (1785-1863) とヴィルヘルム Wilhelm Carl (1786-1859)、カール Carl Friedrich (1787-1852)、フェルディナント Ferdinand Philipp (1788-1845)、ルートヴィヒ・エーミール Ludwig Emil (1790-1863)、そして末子の妹ロッテ Charlotte Amalie (1793-1833) である。この他、ヤーコプの前に生まれたフリードリヒ Friedrich Hermann Georg (1783-1784) をはじめ、2歳に満たず夭折した子が3人いた。フェルディナントが生まれた1788年には一家はハーナウに居住していたが、3年後にシュタイナウへ転居する。父フィリップ・ヴィルヘルムが1796年に44歳の若さで亡くなってからは長男ヤーコプが家長の役割を務めた。

ヤーコプとヴィルヘルムは父の死後、伯母の資金援助を受けてカッセルでリュツェーウムに就学した後、マールブルク大学で法学を学び、ふたりの将来の進路を大きく決定づけることとなる師フリードリヒ・カール・フォン・サヴィニーと出会う。また同じ頃、アヒム・フォン・アルニムとクレメンス・ブレンターノの下で歌謡集『少年の魔法の角笛』（以降、『角笛』と略記）の歌謡蒐集作業に従事する。「グリム兄弟」の類まれな勤勉さと知力はこの少年時代から頭角を現し始める。

弟フェルディナントとルートヴィヒ・エーミールも兄の後を追ってカッセルで就学したのだが、兄たちに比べ成績は思わしくなかったらしい。どちらもギムナジウムを卒業することなく退学 (verlassen) した。その後、フェルディナントとルートヴィヒ・エーミールはヤーコプとヴィルヘルムと共に『角笛』に携わっている。これについては後段で述べる。

フェルディナントは書類上、「文筆業で生計をたてるために」学校を辞めたことになっている。これは成績不振による退学の際に書かれる定型文に過ぎないのだが、レレケによると「彼のこの先の運命を見ると悲劇的アイロニーのように思われる。あたかも文面を文字通りに受け取ろうとしたかのよう、彼はその生涯を通じて〈文筆業〉だけに従事した。一旦し〈生計をたてる〉ことだけはほとんど出来なかった。最終的にフリーのライターとして生活するつもりであったにしろ、彼は食べるものにも事欠く状態で死んだのだ⁵」。フェルディナントは終生貧乏であった。一度は校正・校閲として出版社に就職したものの解雇されてしまい、生涯の大半の時期において生活費を仕送りに頼っていた。父を亡くして裕福とは言い難かったグリム一家、特にその家長たるヤーコプにとって、すねかじりの四男は常に悩みの種であった。

並外れた勤勉さで次々と大部の仕事を成し遂げた「グリム兄弟」に比し、フェルディナントは能力面で、あるいは性質の面で優秀な人物ではなかったと評価される。これはレレケにおいても、次節に挙げるベーンケとザルコヴィツの文献においても同様である。レレケはフェルディナントの人物像を表す言葉として「鈍重」Phlegma、「愚か」Albernheit、「怠惰」Faulheit、「幼稚」Kindlichkeit、そして「アウトサイダー」Outsider といった表現を用いている。些か感情的なようにも思われる語だが、少なくとも一部は兄が弟を指して使った言葉である。

フェルディナントは優秀で厳格な長兄ヤーコプに対してコンプレックスと重圧を感じていたという。レレケは例としてフェルディナントが妹ロッテに宛てた手紙を取り上げてこれを示す⁷。フェルディナントは出先で自身が体験したことや感じたこと全てを熱心に妹に書き送ったが、長文の手紙の中には兄の名前は一度も出てこない。親愛の情を持つ妹に書く手紙の中では饒舌なフェルディナントだ

5 Hoffmann/Rölleke1979, S. 20.

6 Hoffmann/Rölleke1979, S. 20, 23, u.a.m.

7 Hoffmann/Rölleke1979, S. 21.

が、兄たちのいる自宅ではむしろ寡黙で、ヴィルヘルムは「何日も一言も喋らずにいる」と記している⁸。レレケはヤーコプの言葉を引いて、兄から見たフェルディナント像をこう評価する。

ヤーコプは記す、「ロッセとフェルディナントについて言えば、私はこう確信している。彼らが家から出て行かない限り、我が家では物事があるべきようにうまく行かないのだと。彼らは何も悪いことはしない、だが良いことも一切しない。少なくとも我々他の家族に比べて何もしない。書き表しようもない怠惰に支配されている」無論ヤーコプの目には、怠惰というものは許し難い欠陥と映るのである。しかしながらヴィルヘルムに宛てたこの文面の中で用いられる「我が家」あるいは「我々他の家族に比べて」といった言葉には、年長のきょうだいたちの中に内心では線引きがあって、フェルディナントはそのアウトサイダーと見なされていたという風な響きがある⁹。

ヤーコプとヴィルヘルムはふたりでひとつの「グリム兄弟」として活動し著書を著した¹⁰。ここではレレケはその実態に基づくイメージから、勤勉な「グリム兄弟」ヤーコプとヴィルヘルムに怠惰な「グリムのきょうだい」ロッセとフェルディナントを対置して二組の対を描き出している。両者の間には溝があった。

兄弟間の不和は1810年12月にフェルディナントを襲った「災難」Katastropheによって頂点に達するという。但しこの時に何が起きたのか、具体的なことは分かっていない。書簡の中では言葉を濁して書かれている。ヤーコプは恩師サヴィニーに宛てた1811年3月の手紙で、「私たちの4番目の弟が大きな不幸を体験し、3ヶ月前から希望も救いもない状態なのですが、その発端と理由についてはお知らせすることが出来ません¹¹」と書いた。同時期にヴィルヘルムもアルニムに宛てて、「価値があると感じられる仕事出来るのは大きな慰めになります、弟の不幸がそれで癒えるわけではないとしても。彼はあらゆる仕事を放棄し、それでも知性は保っているのです¹²」と書いている。

ヤーコプの1811年1月にアルニムに宛てた手紙にはこうある。

クリスマスからこちら、私たちは紙に記すことも語ることも出来ないような不安と心痛の中で生きています。ただあなたの平穏のためにこう言っておきます。全ては再び最良の道に、彼が辿ることの出来た道に、戻っていくということ、そして私たちはフェルディナントに関わる全てを神に祈っていることを。私は弟を愛しています、何故ならば彼はまったくもって善良で勇敢なのです、私たち全員よりも。ですが上の事情については決して私に尋ねないでください¹³。

8 a. a. O.

9 Hoffmann/Rölleke1979, S. 23.

10 横道誠：グリム兄弟とその学問的後継者たち — 神話に魂を奪われて — (ミネルヴァ書房) 2023、第2章「兄と弟の魂が共鳴する？」を参照。感性や思考に食い違いはあったが、それでも互いを「魂の片割れ」として扱ったことが示されている。

11 Hoffmann/Rölleke1979, S. 23f.

12 Hoffmann/Rölleke1979, S. 24. ここで言われる「価値があると感じられる仕事」は1812年に初版が刊行される『子どもと家庭のメルヒェン』第1巻の準備作業を指す。

13 a. a. O.

上掲の手紙とは真逆な表現に見えるが、レレケはこのヤーコプのフェルディナントに対するとってつけたような愛情表明を罪の意識によるものではないかと読んでいる。弟を日陰者として扱ったことへの罪悪感である。一方、ヴィルヘルムの言葉はより強く直截な怒りを面に出す。

彼は世俗のことやあらゆる情勢から乖離して、そうしたものを軽視しています。ただ幾ばくかの感覚に過ぎないものを追いかけて回しているのです。それも初めは、そして根底においては何か真実を孕んでいたものでも、彼は何かをそっとしておいたり彼自身じっとしていたりするということが出来ないで、無理に引きずりこんで駄目にしてしまうのです。まぎれもなく真実でないこと、自然に反すること、それでいてそういうものばかりをもっとも真でありもっとも高尚であると見なしているのです。¹⁴

抽象的な文章であるが、経済面において自活できないまま読書と夢に生きている弟への憤激であろうか。ヴィルヘルムはまた「厳しさ、もっと言うなれば強制力がフェルディナントには責務だ。もし彼が目に見る努力を何かしらしていたならば自由なままにしてやれたはずだった。だが今や彼は破滅に陥っている¹⁵」とも書いた。フェルディナントの「不幸」Unglück は彼自身のみならず、家族に波及するものであったことが窺える。

この件が経済面にも影響のあったことは間違いなく、以後フェルディナントは定期的に兄弟に金銭を無心するようになる。何らかの形で生計の道を失ったらしい。1812年にはカッセルの家を離れ、ミュンヘンで暮らす弟ルートヴィヒ・エーミールの下に滞在することになるが、その際フェルディナントが世話していた鳩を売り払って「はした金¹⁶」に変えたとヤーコプは記す。家禽を飼う余裕もなくなっていたのである。

家では一言も話すことなく数日過ごしていたというヴィルヘルムの証言からは陰気な印象を受けるが、ミュンヘンでのフェルディナントは活発であった。作家カール・ゴットロープ・クラマー、言語学者ヨーハン・ゴットリーブ・ラードルフ、ゲルマニスト（ゲルマン学者）ベルンハルト・ヨーゼフ・ドーセン、そして作家ジャン・パウルとも交流を持ったという¹⁷。但し人好きのする人物になったとは言い難いようで、フェルディナントがジャン・パウルについて記した手紙は「この敬意を欠くなれなれ¹⁸しい描写からは、フェルディナントの肥大した自意識が無視し得ないほど覗いている」と評される。

弟ルートヴィヒ・エーミールはミュンヘンでのフェルディナントについて回想する。

いつも図書館に出かけて、図書館に勤めているドーセンと一緒にいることが多かった。他にもあらゆる人々と交流があった。家ではたくさん書き物と読書をしていた。何の作業をしていたのかは知らない。それについては何も話してくれなかった。コンサートや芝居に行くのも好んでいた。役者と歌手についてはよく不満を零していた。建築物、絵画、その他あらゆるものに文句を言って、たいがい非常に辛口だった。（中略）彼は絵と音楽に目覚ましい才能があって、模倣の才も少しあった。思う通りに顔や身体を動かすことができた。だが彼はわがままで、内向的で、往々

14 Hoffmann/Rölleke1979, S. 24f.

15 Hoffmann/Rölleke1979, S. 25.

16 Hoffmann/Rölleke1979, S. 27.

17 Hoffmann/Rölleke1979, S. 28.

18 Hoffmann/Rölleke1979, S. 29.

にして愛想も悪かった。¹⁹

先述のヴィルヘルムによる評価と合わせると、偏屈な芸術家風の人物像が見えてくる。フェルディナントが生きた19世紀前半のドイツはビーダーマイヤー文化の時代である。快適に整えられた家庭や勤勉さに至上価値を置く小市民文化の中で、こうした人物は現代以上に受け入れられなかったであろう。

ミュンヘンで2年を過ごした後、フェルディナントはアルニムの口利きによってベルリンのゲオルク・ライマー出版社に校正・校閲の職を得る。月給20ターラーは当時のプロイセン王国において薄給の部類であったが、出版社を営むライマー家は献身的に面倒を見てくれ、また「グリム兄弟」にとっても身内が出版社に勤めることは都合が良かった。ヤーコプとヴィルヘルムは当時カッセルに居住していたが、彼らの『子どもと家庭のメルヒェン』は第2版までこのベルリンの出版社から刊行されている。²¹

フェルディナントはベルリン時代に多くの人物と対面した。サヴィニー、アルニムとその妻ベッティーナ、文学者フリードリヒ・ハインリヒ・フォン・デア・ハーゲン、古典文献学者カール・ラッハマン、詩人エルンスト・アルント、ホフマン・フォン・ファラーズレーベン、ハインリヒ・ハイネといった著名人も含まれる。²² この時期のフェルディナントは当時のドイツ文学界の片隅に位置していたとも言えるだろう。人格面の欠点があったにしろ、フェルディナントは読書家で文学に造詣が深く、文才も少なからず有していた。「ベルリンにいれば、彼はその読書熱を快適にかつ費用をかけずに満たすことができた。またこのベルリン時代においては、距離を置くことで兄弟との関係も改善した²³」とレレケは見る。

一方で、ベルリンでの生活は経済的には極めて苦しかった。プロイセン王国の首都ベルリンの物価は高く、フェルディナントの収入は低い。フェルディナントは在職中も幾度か兄弟に仕送りを頼んでいる。²⁴ 出版社を解雇された1834年の手紙にはこうある。

収入のために、冬の間ずっと暖房のない閉め切った部屋に夜遅くまで座っていて、シーツやぼろきれにくるまり、10分おきにかじかむ指を灯火にかざした。賃金をもうほんの少しでこの手に掴むところだったのに、あつかましい運命がまた私から全てを奪い取った。²⁵

生活苦のためかこの頃フェルディナントは病身で度々欠勤を繰り返していたらしい。退職後はゲッティンゲンに移り住んでいた兄弟らと共に暮らすことになり、身体は靦面に回復を見せた。ところが

19 Hoffmann/Rölleke1979, S. 29f

20 鈴木潔：ターラー、グルデン、グロッシェンなど：ドイツ・ロマン派研究資料 [同志社大学商学会『同志社大学商学部創立三十周年記念論文集』1980、377-395頁]、386-392頁。

21 第3版以降はヤーコプとヴィルヘルムがゲッティンゲン大学で職を得たことに伴いゲッティンゲンのディーテリヒ社に移行する。横道2023、166頁。

22 Hoffmann/Rölleke1979, S. 31.

23 Hoffmann/Rölleke1979, S. 33.

24 Hoffmann/Rölleke1979, S. 34. 後述する編著作も、副収入を得ることがひとつの目的であったのではないかとレレケは述べる。

25 Hoffmann/Rölleke1979, S. 35.

別の問題をヤーコプが記している。

フェルディナントに関する心配事はこのようなものです：彼は2年間私たちと共に暮らし、身体はとっくに健康になっています。しかし働くことや何かをすることができません。極端に頑固で怠惰で、そのくせ誇り高くはないのに自惚れています。一緒にテーブルにつきますが、黙りこくっているか子どもたちと一緒にふざけるかです。²⁶

46歳になってなお青年時代と変わらぬ振る舞いをする弟にきょうだいたちは手を焼いていたことが分かる。この後、フェルディナントはゲッティンゲンの家を出てひとりヴォルフエンビュッテルに移住した。但しそこで職を得たというわけでもなく、1837年1月にはヤーコプが叱責の手紙を送っている。それによるとやはり生活費を兄からの仕送りに頼っており、自力で稼げという叱咤である。²⁷

同年11月にはいわゆるゲッティンゲン七教授事件が起きる。当時ゲッティンゲンはハノーファー王国に属するが、新国王となったエルンスト・アウグストは王国の憲法破棄を宣言した。これに対しゲッティンゲン大学の教授7名が連名で抗議文を提出した一件である。ゲッティンゲン大学に教授職を得ていたヤーコプとヴィルヘルムもこの7名の中に名を連ねており、当局より免職を言い渡される。失職の身でハノーファーを出てヘッセン王国のカッセルに戻ったヤーコプは、そのような中でも相変わらずの叱責と共に可能な限りの額をフェルディナントに送っていた。²⁸後、ヤーコプとヴィルヘルムは1840年にプロイセン王国のベルリン大学に招聘されて再び職を得る。

フェルディナントは1848年の3月革命を迎えずに亡くなった。1844年12月31日、アルバート・シュミット博士という法曹からヤーコプに危篤の知らせが届く。ヤーコプはヴォルフエンビュッテルに急行し、翌年1月6日にフェルディナントの最期を看取ったことをヴィルヘルム宛に報告した。²⁹

2.2 ベーンケ／ザルコヴィツ『よそものフェルディナント』

レレケとホフマンの編著作も踏まえ近年刊行されたのが、ハイナー・ベーンケとハンス・ザルコヴィツによる『よそものフェルディナント：知られざるグリムの兄弟のメルヒェンと伝説』（2020）³⁰である。こちらはレレケ／ホフマンよりもさらに詳しく書簡などを引用し、また編著者による推測も交えながらフェルディナントの生涯を描写している。大勢はレレケの記述と重なるため繰り返すことはしないが、異なる視点を挙げておきたい。

まず一点目として、レレケ／ホフマンはフェルディナントの遺稿から伝説を収録したが、ベーンケ／ザルコヴィツはフェルディナントが偽名で刊行した伝承集から数編を選んで掲載・解説している。

次に、伝承テキストに注力したレレケ／ホフマンが取り上げなかった小説『ヘンリエtteおばさん』*Tante Henriette* (1835) を収録している点が特徴的である。ベーンケ／ザルコヴィツによるとグリム一家をカリカチュアしたような私小説で、登場人物には本名をもじった名前がつけられている。ヘン

26 Hoffmann/Rölleke1979, S. 36.

27 Hoffmann/Rölleke1979, S. 37.

28 Hoffmann/Rölleke1979, S. 37f.

29 Hoffmann/Rölleke1979, S. 38f.

30 Heiner Boehncke, Hans Sarkowicz: *Der fremde Ferdinand. Märchen und Sagen des unbekanntenen Grimm-Bruders*. AB - Die Andere Bibliothek. 2020.

リエッテとはヴィルヘルムの妻ヘンリエッテ・ドロテア（ドルトヒェン）を指す³¹。フェルディナントはこの小説を「フリードリヒ・グリム」³²の筆名で『教養人のための深夜新聞』*Mitternachtzeitung für gebildete Stände* に投稿した。

小説を取り上げたことは、ベーンケ／ザルコヴィツの力点を表している。即ち、本書においては文筆家としてのフェルディナント像を浮かび上がらせようという意図が見受けられる。ベーンケ／ザルコヴィツによるとフェルディナントはこのフリードリヒ・グリムの筆名でヴォルフエンビュッテルに住民登録しており、職業欄には「作家」*Schriftsteller* と記入されている。但しレレケが既に述べたように、フェルディナントが作家として糧を得ていたという事実はない。ベーンケ／ザルコヴィツが強調したかったのは、フェルディナントが「作家として見られたい」³⁴という願望を持っていたはずだという点である。同書では父方の祖父が若いフェルディナントからの手紙を殊に喜んだことが記述される。これはフェルディナントの文才を示す逸話として挙げられている³⁵。

またこの編著作では、レレケが詳細不明として保留した1810年の「災難」にも踏み込んでいる。ベーンケとザルコヴィツはこの年のクリスマスに一家を襲った不幸な出来事について、こう述べる。

1815年にヤーコプは苦々しくまとめている。「彼は10年間不幸で間違った生き方をしてきて、私たちが悲しませているのだ」と。(改行、中略) ヤーコプとヴィルヘルムは何故1809年5月の書簡を思い出そうとしない、あるいはそう出来ないのか？ リゼッテ・ヴィルトがヤーコプに確かめた「疑念」について、彼は弟ヴィルヘルムへの手紙で何気なく書いているのだ。フェルディナントは12月25日に家族が集まっている時、何かしらの〈カミングアウト〉Coming-outをしたのである。クリスマスの平穏というものは効果的に破られるように出来ているものだという事は19世紀には既によく知られていたようだ。もしフェルディナントがホモセクシュアルであることが内輪の秘め事で済んでいたなら、誰をも刺激することなどなかっただろうに。だがそれは今やいわば公然のこととなってしまう、もっと悪いことにはフェルディナントはそれを暴露してしまった。これは我々の推測に過ぎないが、おそらくフェルディナントの芝居がかった流儀には、自身の〈自然に反すること〉について表明してやるぞという秘めた激情があったのだ³⁶。

〈自然に反すること〉Unnatur という表現はヴィルヘルムがこの件を記す際に怒りと共に用いた表現である。ベーンケとザルコヴィツはこれを同性愛を指すものと理解した。その根拠として挙げているリゼッテ・ヴィルト（旧姓）、あるいは結婚してエリザベート・エシュヴェゲとはヴィルヘルムの妻ドロテア（ドルトヒェン）の姉である。1809年5月の書簡とは、ヤーコプがヴィルヘルムに送った下記の手紙を指す。

ところで、私がフェルディナントについて持っていた、お前にも話したあの疑念について、リ

31 Boehncke/Sarkowicz 2020, S. 397.

32 この筆名はヤーコプの前に生まれて数ヶ月で夭折した長男フリードリヒの名前からとったのではないかとされる。Boehncke/Sarkowicz 2020, S. 324.

33 a. a. O.

34 Boehncke/Sarkowicz 2020, S. 323.

35 Boehncke/Sarkowicz 2020, S. 327ff.

36 Boehncke/Sarkowicz 2020, S. 360.

ゼツテが自ら進んで私に確認してきたよ。神ぞ知る、私が少しでも話しかけない限り彼の方からは一音節だって喋らないのだ。カールにはもっと喋らない。ただロツテとだけは昔のように喋るのだが。お前にもフェルディナントについて書いて知らせられることは何もない、ただ早々と就寝して、しかしだからといって早起きはしないということだけだ。³⁷

この手紙から読み取れることは、ヤーコプがフェルディナントに対して何らかの「疑念」 Verdacht を持っており、それをヴィルヘルムと相談していたことである。続く往復書簡の中でリゼツテ及びその夫となるカール・エシュヴェゲとフェルディナントの就職について相談していたらしい様子が書かれているが、「疑念」の内容については記されていない。

ベーンケ／ザルコヴィツは小説『ヘンリエッテおばさん』の中に真相が書かれていると述べる。³⁸ これについては私小説の内容がどの程度事実を反映しているかを含め、今後分析を進める必要があるように思われる。1810年の事件は兄弟間の亀裂を修復不可能にする決定打ではあったかも知れない。家庭を重視するビーダーマイヤー文化において同性愛が白眼視されたに違いないということにも蓋然性はある。³⁹ しかし、果たしてそれだけがフェルディナントの業績を日陰に追いやった原因だろうか。センセーショナルな事件をあまりに強調し過ぎることは本懐を見失うことにも繋がりがねない。

レレケ／ホフマンの「知られざる」 unbekannt、あるいはベーンケ／ザルコヴィツの「よそのもの」 fremd⁴⁰ という表現からは、一家のはみ出し者としてのフェルディナント像が容易に思い描かれる。レレケは文中でより直截に「アウトサイダー」⁴¹ という言葉を用いている。

両者が共通して高く評価するのはフェルディナントが大変な読書家であったこと、筆まめな人物であり文才にも恵まれていたことである。文筆業として食べていけなかったのは才能の有無ではなく、心身の不調により就労困難であったためと理解されている。⁴² 一方、ネガティブに評価される点としては、上述の1810年の件に加え、兄たちと真逆の「ボヘミアン」な性質、そしてこの性質に起因する家族との不仲が挙げられる。

それでは、フェルディナントが「グリム兄弟」の仕事に少なからず関与していながら、兄たちの陰に隠れて不世出であったのは人格や対人関係の問題だったのだろうか。次節ではフェルディナントの民間伝承に関わる仕事内容について述べる。

37 Boehncke/Sarkowicz 2020, S. 351.

38 Boehncke/Sarkowicz 2020, S. 357.

39 但し、19世紀ヨーロッパにおける性的少数者の様相や迫害の実態については未だ不明瞭な部分が多い。ベルント・レック（中谷博幸・山中淑江訳）：歴史のアウトサイダー（昭和堂）2001、154-159頁。なおプロイセン刑法143条において男性間の性交が犯罪と規定されるのは1851年である。

40 「よそのもの」 der Fremde は、カミュの小説『異邦人』 L'Étranger のドイツ語訳の題にも使われる言葉である。

41 Hoffmann/Rölleke 1979, S. 34. また、ルートヴィヒ・エーミールが描いた家族像の中で、「アウトサイダー」フェルディナントだけがひとり離れて後背に立っている。

42 フェルディナントは病気によってナポレオン戦争の兵役からもひとり逃れている。Boehncke/Sarkowicz 2020, S. 371.

III 民間伝承蒐集の仕事への貢献

3.1 『少年の魔法の角笛』

アルニムとブレンターノによる歌謡集『少年の魔法の角笛』はドイツ語圏における民謡蒐集のさきがけとして知られる。ヤーコプとヴィルヘルムの「グリム兄弟」がこの歌謡集にテキストを提供していたこともよく知られているが、彼らの弟であるフェルディナントとルートヴィヒ・エーミールも初めは協力者として名を連ねていた。

フェルディナントは2年ほどで『角笛』の作業から離れる。一方、ルートヴィヒ・エーミールは蒐集ではなく絵によって引き続き貢献するようになった。『角笛』の表紙絵はルートヴィヒ・エーミールの手によるものである。アルニムとブレンターノは彼の絵を気に入り、旅先にも同行させて絵を描かせた。⁴³

レレケによると、記録が破棄されてしまっているためにフェルディナントが関与したテキストの具体的な数などは不詳だが、『角笛』の原稿の一部、15～16世紀の比較的長い民謡テキストの筆写の中にフェルディナントの筆跡が見つかったとのことである。フェルディナントは『角笛』の作業に携わる中で古文書から民間伝承を抜粋し書き写す手法を身につけたと考えられる。これが後の活動に繋がっていく。

3.2 『子どもと家庭のメルヒェン集』と『ドイツ伝説集』

『角笛』から離れたヤーコプとヴィルヘルムはその後にも精力的に伝承の蒐集を続け、『子どもと家庭のメルヒェン』及び『ドイツ伝説集』*Deutsche Sagen* (1816/1818)を刊行する。加えて、蒐集したテキストを用いて数々の研究を成し遂げた。「グリム兄弟」の伝承蒐集においては様々な人物が協力している。⁴⁵フェルディナントもまたそのひとりであった。

たとえばヤーコプ・グリムの初期論文『古ドイツの職匠歌について』(1811)では、献辞が「我が愛するふたりの弟、ヴィルヘルムとフェルディナントに」⁴⁶捧げられている。

また1816年の『ドイツ伝説集』第1巻序文では、最後に「助力を惜しかなかった我らの弟フェルディナント・グリムと我らの友人アウグスト・フォン・ハクスタウゼンとカローフェにここで改めて感謝を述べる」と記されている。但し同書はルートヴィヒ・エーミールの誕生日に刊行され、中表紙にも末の弟に向けた「心からの愛を込めて」という言葉が刻まれていた。⁴⁸こうしたルートヴィヒ・エーミールとの対比はフェルディナントに複雑な不満を抱かせた。⁴⁹

ベーンケ／ザルコヴィツによるとどの伝説がフェルディナントによって提供されたものかは未詳である。しかしフェルディナントからヤーコプとヴィルヘルムに宛てた1813年の手紙には、兄たちの

43 Boehncke/Sarkowicz 2020, S. 345.

44 Hoffmann/Rölleke 1979, S. 11-12.

45 ハイッツ・レレケ (小澤俊夫訳): グリム兄弟のメルヒェン (岩波書店) 1990.

46 Hoffmann/Rölleke 1979, S. 12.

47 Brüder Grimm (ediert und kommentiert von Heinz Rölleke): *Deutsche Sagen*. Ausgabe auf der Grundlage der ersten Auflage. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1994, S. 24.

48 Hoffmann/Rölleke 1979, S. 12.

49 a. a. O. Boehncke/Sarkowicz 2020, S. 345.

ために日々伝承を蒐集しているということが書かれる⁵⁰。

「グリム兄弟」の仕事の中で最も有名な『子どもと家庭のメルヒェン集』（『グリム童話集』）にも、フェルディナントが提供したメルヒェンが含まれることが分かっている。KHM80「めんどりの死のこと Von dem Tode des Hühnchens」とKHM109（初版23）「経帷子 Das Todenhemdchen」の2話である⁵¹。

「グリム兄弟」が『子どもと家庭のメルヒェン』に取り組んだ19世紀は、民間伝承というものの存在意義が大きく変わる転換期である。この頃、民間伝承には3つの価値が見出された。ひとつは文学的価値である。ルートヴィヒ・ティークのメルヒェンやノヴァーリス『ハインリヒ・フォン・オプターディングン』をはじめ、ロマン主義時代の文壇においては伝承文学としてのメルヒェン、またその様式を模した創作メルヒェンにそれまでの文学にはない詩的な美点が求められた。

もうひとつは商業的価値である。義務教育の漸次的広まりと共に識字率が向上し、読書が大衆的な娯楽として普及した⁵²。メルヒェンや伝説は読み物として楽しまれるようになった。18世紀の啓蒙主義時代には、こうした「お話」は理性的認識能力を害するものとして否定されていた。しかし文学的価値が認められると同時にこの評価は反転し、学校教材にもメルヒェンは取り入れられるようになった。

学校外でも伝説や民間伝承は価値を生み出す。それが旅行である。19世紀ヨーロッパでは交通網が整備され、余暇の過ごし方として旅行が一般化する。現在も広く利用されるベデカー社の旅行ガイド本も1828年に刊行が始まった。そうした中、たとえばハイネの『ハールツ紀行』に見られるように伝説・伝説的記述を書き込んだ旅行記や旅行ガイド、紀行文風小説が盛んに出版されている。

しかし最も画期と言えるのは、学術的価値が見出されたことである。「グリム兄弟」への評価も『子どもと家庭のメルヒェン』の商業的・文学的成功のみならずこの点に負う部分が多い。伝承を蒐集し研究資料として扱える形で保存・刊行すること、これは「グリム兄弟」が初めて提唱した。『角笛』のテキスト蒐集は古文献の抜き書きから始まったが、「グリム兄弟」は口承伝承こそ真髄と見て⁵³、この蒐集を呼びかけた。後の民俗学におけるフィールドワークという手法の萌芽とされる。

この口承伝承という点において、フェルディナントは兄たちの期待に応えられなかったようだとしてレケは述べる。

1812年と1815年のメルヒェン集序言で既に提示されていた理念として、彼らは口承伝承に重きを置いていた。しかしながらそうした供給源について、フェルディナントは1812年から1814年にかけてのミュンヘン滞在中も、あるいはまた1815年からのベルリン滞在中においても、十分に見つけることが出来なかった。兄たちはフェルディナントに対してよく思わなかったであろう。しばらく後、歴史的民間伝説の特殊な伝承状況からこのことを看破したことに違いない。「少

50 Boehncke/Sarkowicz 2020, S. 373f.

51 Brüder Grimm (hrsg. von Heinz Rölleke): *Kinder- und Hausmärchen*. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm. Mit einem Anhang sämtlicher, nicht in allen Auflagen veröffentlichter Märchen und Herkunftsnachweisen. Stuttgart (Reclam) 2016. 3 Bde. Hier Bd. 3, S. 445f, 457. 『子どもと家庭のメルヒェン集』所収のメルヒェンに関しては慣例に従い番号をKHM（Kinder- und Hausmärchenの略）の後に記す。

52 ラインハルト・ヴィットマン（大野英二郎訳）：18世紀に読書革命は起こったか〔ロジェ・シャルティエ、グリエルモ・カヴァッロ編（田村毅他訳）『読むことの歴史—ヨーロッパ読書史』（大修館書店）2000、407-444頁〕。

53 Helge Gerndt: Sagen und Sagenforschung im Spannungsfeld von Mündlichkeit und Schriftlichkeit. In: *Fabula*, 29. Band (1988) Sonderheft, S. 1-20.

なくともここに報告された物語は口承伝承からくみ上げられたはずである」(『ドイツ伝説集』第2巻(1818)の序言—222話のテキストのうち、口承の伝承に帰されるものはたった6話だった!)⁵⁴

但し、フェルディナントに限らず当時はまだこれが常態であった。口承伝承の聞き取り調査を提唱した「グリム兄弟」自身も実際にはフィールドに出たことがないという事実は、レレケの研究によって明らかにされて以来よく知られている。理念の提唱は始まったものの手法として確立されるには程遠く、現在の民俗学のような水準に至るにはまだ学界全体が試行錯誤の繰り返しを経る必要があった。

IV フェルディナントの伝承集

フェルディナント自身もまた伝説・メルヒェン集を刊行した。但し、何れも筆名によるものである。「ロータル」名義の『ドイツ及び諸外国の民間伝説とメルヒェン』Lothar: *Volkssagen und Märchen der Deutschen und Ausländer*. Leipzig (Brockhaus) 1820、フィリップ・フォン・シュタイナウ名義の『ドイツの民間伝説』Phillip von Steinau: *Volkssagen der Deutschen*. Zeitz (J. Schieferdecker) 1838、そしてフリードリヒ・グリム名義での『山城と山のメルヒェン』Friedrich Grimm: *Burg und Bergmärchen*. Wolfenbüttel (Holle'schen Buch-, Kunst- und Musikalien-Handlung) 1846がこれにあたる。このうち、最後の『山城と山のメルヒェン』は本人の没後に遺稿から刊行されている。

4.1 ロータル『ドイツ及び諸外国の民間伝説とメルヒェン』(1820)

フェルディナント1冊目の編著は、ベルリン時代に編纂された伝説・メルヒェン集である。題の通り、ドイツの伝承に加えてオランダ、デンマーク、スウェーデン、イングランド、スコットランド、イタリア、フランス、スペイン、ロシア、ポーランド、そして若干数のヨーロッパ外からの伝承を収録している。

同書は長く「ロータル」という筆名の人物が不明のままになっていたが、これがフェルディナント・グリムであることを1981年にゲルト・ホフマンが突き止めた。ホフマンの論文によると、ドイツ外の伝説を収録することで兄たちの『ドイツ伝説集』と補完的關係を企図したのではないかということである。しかし、この意図は受け入れられなかった。フェルディナントは出版に先立ち兄たちに見本を送付している。これに対して、兄たちは書簡を通して率直な批評を返した。

まずヤーコプはこのように述べている。

諸外国の伝説を出版したいというお前の目論見についてだが、もっとよくテキストを吟味してもらいたいものだと思う。それからこういう懸念もある、お前は果たして本物の外国の典拠を自分自身できちんと利用したのだろうか? と。この本はともすると読み物としての評価しか得られないのではないか。⁵⁷

(1816年書簡)

54 Hoffmann/Rölleke 1979, S. 13.

55 レレケ前掲 1990.

56 Gerd Hoffmann: Der Sagen- und Märchensammler »Lothar« war Ferdinand Grimm. In: *Brüder Grimm Gedenken*. Bd. 3, Marburg 1981.

57 Hoffmann/Rölleke 1979, S. 13.

次にヴィルヘルムからの返書にはこうある。

口承伝承に基づく生きた伝説のみに限るべきだったと思う。本から古い伝説を抜き出した分に
関しては、お前は必要な見通しが欠けている。⁵⁸

(1820年書簡)

語学に長けたヤーコブから見ると、フェルディナントが自分のように原典を自在に繰って資料を見極めるということは到底想像し得なかった。但しヤーコブは相棒たるヴィルヘルムについてさえも語学力が自分に劣ると評価しており、フェルディナントの能力不足というよりはヤーコブの基準が突出しているとも言える。またヴィルヘルムの言う「見通し」は、諸外国と銘打ったものの対象となる国・地域の選択基準が曖昧で、網羅性に欠けることを指したと思われる。

4.2 フィリップ・フォン・シュタイナウ『ドイツの民間伝説』(1838)

ふたつ目の伝説集はヴォルフエンビュッテル移住後に刊行された。フィリップ・フォン・シュタイナウ、即ち「シュタイナウのフィリップ」はフェルディナント自身のミドルネームとシュタイナウという地名の組み合わせである。フェルディナントのみならずグリム家の兄弟たちにとって、シュタイナウで一家揃って暮らした幼少期は人生のうちで最も美しく満ち足りた時代であったという。⁵⁹ その懐古を匂わせる筆名である。

『ドイツの民間伝説』はフェルディナントの没後、架空の編者名で再利用された。エドムント・フォン・フェルシュタール『ドイツ民衆の伝説集成』(1846)、カール・フォン・ファルケンシュタイン『皇帝の伝説、山城と修道院のメルヒェン』(1850)がそれである。

フェルディナントは兄との往復書簡の中で、このメルヒェン集を一般読者にも楽しんでもらいたいと語っていたことをレレケが指摘している。『ドイツの民間伝説』序文は、「この皇帝の伝説と修道院のメルヒェンの本はまず何よりも、ドイツの川辺や草地を巡る旅人の伴として」⁶⁰ という文言から始まる。伝説やメルヒェンを旅の伴にというコンセプトは当時珍しいことではなかった。⁶¹ むしろ上述のように、ある種の流行であったと言ってもよい。

このコンセプトを示すように、『ドイツの民間伝説』は地域基準配列をとる。1話目「カール大帝」はアーヘンにおけるカール大帝の伝説を記し、第2話「フリードリヒ2世」、第3話「オットー3世」、第4話「赤髭帝の城塞」までドイツ史における偉大な皇帝にまつわる伝説を記録し、第5話からは各地の城塞にまつわる伝説を、ドイツ全域をぐるりと反時計回りにめぐりながら収録する。読者は旅程に沿って行き先に関わる伝説を楽しむことができるつくりになっている。「グリム兄弟」の『ドイツ伝説集』はモチーフに基づいて配列されて⁶² おり、対照的と言える。

58 Hoffmann/Rölleke 1979, S. 14.

59 Boehncke/Sarkowicz 2020, S. 331-336. 但し兄弟は思い出の地を実際以上に美化していることにも各々自覚的であった。ハルム＝ペア・ツィンマーマン(大野寿子訳):グリム兄弟と故郷ヘッセンとの相反的な関わり [大野寿子編『カラー図説 グリムへの扉』(勉誠出版)2015, 47-70頁]。

60 Philipp von Steinau: *Volkssagen der Deutschen*. Zeitz (Julius Schieferdecker) 1838, S. III.

61 z. B. Adelheid von Stolterfoth: *Rheinischer Sagenkreis. Ein Ciclus von Romanzen, Balladen und Legenden des Rheins, nach historischen Quellen bearbeitet*. Frankfurt am Main (Jügel) 1835.

62 植朗子:『ドイツ伝説集』のコスモロジー — 配列・エレメント・モチーフ — (鳥影社)2013。

4.3 フリードリヒ・グリム『山城と山のメルヒェン』(1846)

3冊目の『山城と山のメルヒェン』はフェルディナント没後に遺稿から刊行された編著で、ヴォルフエンビュッテルの出版社から出ている。おそらくフェルディナントは晩年までこのメルヒェン集の刊行に向けて取り組んでおり、原稿を出版社に渡していた。ベーンケ／ザルコヴィツはフェルディナントの移住先がヴォルフエンビュッテルであった動機を、当地のアウグスト公立図書館の豊富な蔵書に求めている。1844年12月、没する僅か数日前にも本を借り出した記録が残っているという。⁶³

ホフマンによるとこのメルヒェン集は枠物語の中に伝説が組み込まれる構造になっている。⁶⁴これがフェルディナント自身の企図に基づく構成か遺稿を刊行した出版者の手によるものかは不明である。

フリードリヒ・グリムという筆名は上述の通り小説『ヘンリエッテおばさん』に使われ、またフェルディナントの住民登録にも記載された名前である。父方の祖父、あるいはヤーコプの前に生まれて夭折した赤子フリードリヒの名から取ったと見られる。

V おわりに

1979年の編著の中で、フェルディナントの書き記した伝承を復刻する意義についてレレケは次のように述べている。⁶⁵

1. ゲルマニスティク（ゲルマン学、ドイツ語ドイツ文学）と民俗学という学問の興りに寄与した偉大な「グリム兄弟」の陰に隠れた弟が、兄たちと類似の仕事をしていたことを世に知らしめることで、彼を日陰に追いやってしまった罪を払拭する
2. これまで目の目を見なかった口承伝承のテキストは民俗学的伝説研究のよい材料となる
3. フェルディナントによる伝承テキストの脚色処理を「グリム兄弟」の、なかんずくヴィルヘルムの処理方法と比較分析することで新たな研究の視座が開ける

3点目に関して、フェルディナントが伝承テキストを出版用に整えた際の文体について、レレケは次のように評価する。

彼が書き記した伝説の草稿、そしてメルヒェンや伝説の編集をグリム兄弟のそれと比較してみると、次のことが明らかである。フェルディナントの文体は—特に後の版になるほど—『グリム童話集』と『ドイツ伝説集』の中間に位置する。『グリム童話集』は滑らかで、心地よい、民衆的 (volkstümlich) で素朴な言葉の特徴的な軌跡をもって物語られる。『ドイツ伝説集』は素っ気なく、いっそ事務的ですからあり、いずれにしても誰にでも好まれるような語り口ではない。その点、フェルディナントの語り口はヴィルヘルム・グリムのメルヒェン脚色に比べてより個人的な特徴を持っている。両者の特性、共通性と固有性についてはヤーコプ・グリムが既に書簡（1820年9

63 Boehncke/Sarkowicz 2020, S. 403f.

64 Hoffmann 1981.

65 Hoffmann/Rölleke 1979, S. 15.

月17日付)でフェルディナントに示している。⁶⁶

フェルディナントの編著作を研究する意義もこれらの点にある。『子どもと家庭のメルヒェン集』をヤーコプとヴィルヘルムは学術的価値のあるものにしようと考えていたが、同書が「聖書に次ぐ世界的ベストセラー」となったのはむしろテキスト編集の成果によるという当人から見ると皮肉な結果が指摘されている。これに比べテキスト編集を控え学術性に重きを置いた『ドイツ伝説集』は当時評価を得られなかった。「グリム兄弟」の仕事は文学作品としての伝承集と研究用資料集としての伝承集との間の揺らぎの中にある。グリムのみならず、19世紀に出た伝承集の多くがこの揺らぎを内包している。

ヴィルヘルムの子ヘルマン・グリム Hermann Grimm (1828-1901) は「ヤーコプとヴィルヘルム・グリムは『ドイツ伝説集』を〈読本〉として成功させようと考えていたわけではない⁶⁷」と述べ、オーストリアの民俗学者レーオポルト・クレツェンバッハーもまたヤーコプの著作『ドイツ神話学』に寄せて「他の編者たちは芸術家 (Künstler) であり、故に〈自由〉だった。他の者はヤーコプが彼の弟と共に取りくんだような学術的真実性 (wissenschaftliche Wahrheit) を求める必要がなかったのだ⁶⁸」と「グリム兄弟」の学術性を評した。

こうした「グリム兄弟」への評価と対比すると、フェルディナントの仕事の特色も浮かび上がってくる。即ち、兄たちとは逆に、フェルディナントは〈芸術家〉ないし〈文筆家〉であろうとしていた。彼は自分の伝承集を読み物としても世に問いたいと考えていた。しかし同時に、兄たちの目指した学術性をも捨てきれなかったらしい。実現はしなかったものの、典拠や資料目録を付けた再版を作りたいと希望を述べていた。⁶⁹ これらを両立させようと模索したところに彼の特色がある。

「グリム兄弟」と近いところで活動し、しかし道を分かつことになったフェルディナントの編著作は「グリム」と似て非なるものである。これを研究することはグリム研究に対して、ひいては19世紀ドイツ語圏の文学・民間伝承をめぐる様相を明らかにすることに対して、他では得られない視点をもたらすだろう。

最後に、フェルディナントの伝承集について、レレケが上で行っているような個々の文体の分析だけでなく、取り上げられたモチーフや全体の構成について分析することは、『ドイツ伝説集』及び『子どもと家庭のメルヒェン』との比較研究において必要な観点であると考えられる。『ドイツの民間伝説』の節で若干の展望を示したが、これを今後の課題としたい。

附：フェルディナント・グリム 略年表

1788	ハーナウに生まれる
1791	グリム一家、シュタイナウへ転居
1796	父フィリップ・ヴィルヘルム没

66 Hoffmann/Rölleke 1979, S. 15f.

67 Herman Grimm: Vorbemerkung. In: Deutsche Sagen. Vollständige Ausgabe, nach dem Text der dritten Auflage von 1891, mit der Vorrede der Brüder Grimm zur ersten Auflage 1816 und 1818 und mit einer Vorbemerkung von Herman Grimm. Berlin (Rütten u. Loening) 1956, S. 25.

68 Leopold Kretzenbacher: Jacob Grimms „Deutsche Mythologie“ und ihre geschichtliche Wirkung. In: Deutsche Mythologie. Wiesbaden (Drei Lilien) 1 Band (1968) S. III – XXV. Hier S. VIII.

69 Boehncke/Sarkowicz 2020, S. 13.

- 兄ヤーコプとヴィルヘルム、カッセルのリュツェーウムで就学
- 1802-1803 ヤーコプとヴィルヘルム、マールブルク大学で学ぶ
- 1805 アルニムとブレンターノ『少年の魔法の角笛』第1巻
- 1807-1808 カッセルで就学、退学後『角笛』作業に従事
- 1808 母ドロテーア没
- ヤーコプ、ジェローム・ボナパルトの図書館司書
- 1812 グリム兄弟『子どもと家庭のメルヒェン』第1巻
- 1812-1814 ミュンヘンで弟ルートヴィヒ・エーミールのもとに滞在
- 1814 ヴィルヘルム、カッセルで選帝侯の図書館司書
- 1815 グリム兄弟『子どもと家庭のメルヒェン』第2巻
- ヤーコプ「フォルクのポエジーの収集に関する回状」
- 1815- ベルリンの Georg Reimer 出版社で就職
- 1816 ヤーコプ、カッセルで図書館司書
- グリム兄弟『ドイツ伝説集』第1巻
- 1818 グリム兄弟『ドイツ伝説集』第2巻
- 1820 『ドイツ及び諸外国の民間伝説とメルヒェン』
- 1822 グリム兄弟『子どもと家庭のメルヒェン』第3巻
- 妹ロッテ、結婚
- 1825 ヴィルヘルム、結婚
- 1830 ヤーコプとヴィルヘルム、ゲッティンゲン大学で教授／司書
- 1834 出版社を解雇されゲッティンゲンで兄弟と共に住む
- 1835 『ヘンリエッテ叔母さん』
- ヤーコプ『ドイツ神話学』
- 1837 ゲッティンゲン七教授事件
- 1837- ヴォルフエンビュッテルに移住
- 1838 『ドイツの民間伝説』
- 1840 ヤーコプとヴィルヘルム、ベルリン大学へ招聘
- 1845 ヴォルフエンビュッテルで没する
- 1846 『山城と山のメルヒェン』

参照文献

- Ferdinand Philip Grimm (Aus dem Nachlaß hrsg. von Gerd Hoffmann und Heinz Rölleke): *Der unbekannte Bruder Grimm. Deutsche Sagen von Ferdinand Philipp Grimm*. Düsseldorf/Köln (Diederichs) 1979.
- Philipp von Steinau (d. i. Ferdinand Philipp Grimm): *Volkssagen der Deutschen. Zeitz* (Julius Schieferdecker) 1838.
- Heiner Boehncke, Hans Sarkowicz: *Der fremde Ferdinand. Märchen und Sagen des unbekanntenen Grimm-Bruders*. AB - Die Andere Bibliothek. 2020.
- Brüder Grimm (ediert und kommentiert von Heinz Rölleke): *Deutsche Sagen*. Ausgabe auf der Grundlage der ersten Auflage. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1994.

- Brüder Grimm (hrsg. von Heinz Rölleke): *Kinder- und Hausmärchen*. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm. Mit einem Anhang sämtlicher, nicht in allen Auflagen veröffentlichter Märchen und Herkunftsnachweisen. Stuttgart (Reclam) 2016. 3 Bde.
- Helge Gerndt: Sagen und Sagenforschung im Spannungsfeld von Mündlichkeit und Schriftlichkeit. In: *Fabula*, 29. Band (1988) Sonderheft, S. 1-20.
- Gerd Hoffmann: Der Sagen- und Märchensammler »Lothar« war Ferdinand Grimm. In: *Brüder Grimm Gedenken*. Bd. 3, Marburg 1981. Sonderheft, S. 435-444.
- Ingeborg Weber-Kellermann: *Deutsche Volkskunde. Zwischen Germanistik und Sozialwissenschaften*. Stuttgart (Metzler) 1969.
- 植朗子：『ドイツ伝説集』のコスモロジー — 配列・エレメント・モチーフ — (鳥影社) 2013。
- 大野寿子編：カラー図説 グリムへの扉 (勉誠出版) 2015。
- 河野眞：ドイツ民俗学とナチズム (創土社) 2005。
- 高橋健二：グリム兄弟・童話と生涯 (小学館) 1984。
- 橋本孝：グリム兄弟とその時代 (パロル社) 2000。
- 横道誠：グリム兄弟とその学問的後継者たち — 神話に魂を奪われて — (ミネルヴァ書房) 2023。
- ヤーコプ・グリム、ヴィルヘルム・グリム (高木昌史、高木万里子編訳)：グリム兄弟メルヘン論集 (法政大学出版局) 2008。
- ロジェ・シャルティエ、グリエルモ・カヴァッロ編 (田村毅他訳)：読むことの歴史 — ヨーロッパ読書史 (大修館書店) 2000。
- ベルント・レック (中谷博幸・山中淑江訳)：歴史のアウトサイダー (昭和堂) 2001。
- ハインツ・レレケ (小澤俊夫訳)：グリム兄弟のメルヘン (岩波書店) 1990。